

# VIGNY の《Poèmes Antiques et Modernes》考

## (二) 聖書取材詩の特質

田 中 隆 二

昭和51年 9月16日受理

originalité 決定の問題に於て sources 追求が重要であることは論を俟たない。しかしながら、類似のみを顧慮する間は、如何に綿密になされた影響研究と雖も、この問題の解決に寄与するところ必ずしも大きくはない。拙稿『VIGNY の《Poèmes Antiques et Modernes》考 (一) 初期の若干の詩篇における影響の問題』ではそのことを指摘したつもりであった。

本稿で試みることは、類似よりはむしろ差異に着眼して originalité 決定へより直接的かつ前進的な手掛りを掴もうとすることにある。但し、目下は文字通り暗中摸索の状態であり、こゝに述べるところは試論の試論に過ぎない。

《Poèmes Antiques et Modernes》には、周知の通り、《poèmes de l'inspiration biblique》、または、単に《poèmes bibliques》と呼び慣わされている一群の詩篇がある。それ等は前記拙稿『VIGNY の《Poèmes Antiques et Modernes》考(一)』で取り扱った《La Dryade》、《Symétha》等の VIGNY の最初期に作られた詩篇より後の制作のもので、テーマも作風もそれ等とは大いに異っている。蓋し(二)としてこの続篇で取り上げるには、視点を変えると云う見地から、恰好の材料と考えた次第である。

《poèmes bibliques》と総称されるこれ等の詩篇は、主想と単なる語句、着想の直接的と間接的等の相違はあるが、すべて何らかの点で旧約聖書、または新約聖書とつながりがある。原典と写しの差異検討は比較的容易である。originalité、或いは、personnel などの研究と云うことからすると、これ等《poèmes bibliques》は詩集《Poèmes Antiques et Modernes》に収録されている其他の詩篇と比較すると、少なくとも、その点で利点ありと云えるであろう。そこから、この弁別の試みは当然企図されるべきで、また、なされて来たのであって、本稿で《poèmes bibliques》の特質を検討の対象に選んだ理由もそこにある。

さて、《poèmes bibliques》は、通常、《La Femme adultère》に始まり、《Le Déluge》に終る1819年から1823年までに作られた詩篇、即ち、《La Fille de Jephté》、《Moïse》、《Eloa》、及び《Poèmes Antiques et Modernes》には収録されていないが、同じ頃着想され、完成されないまま保存されている詩篇—《Le Jugement dernier》、《Satan sauvé》—や、主題は biblique とは云えないまでも、前記詩篇と同じ頃作られ、類似の精神状態が

感じられる《La Prison》,《Le Trappiste》等の詩篇を含んでいる。しかし、これ等に、更に《Hélène》や《Paris》を加えて VIGNY に於ける聖書の影響をより広範囲に調査した研究者も居り<sup>1)</sup>、完全に固定してゐるわけではない。

《poèmes bibliques》は旧約聖書を主なる source としている。本稿ではそれを最も重要視する立場を取る。従って、まず旧約聖書に素材を得ていると明らかに認められる《La Fille de Jephté》,《Moïse》,《Le Déluge》の三詩篇に焦点を絞って考察する。他の《poèmes bibliques》にはこれ等三詩篇から抽出された特質がそれ等との対比でよりよく理解されられると思われる場合にのみ言及することとする。また、こゝで検討する《poèmes bibliques》の特質とは、旧約聖書との対比で得られるものを意味すると限定して置こう。

(1) 《le Dieu jaloux》,《le Dieu de la vengeance》.

《poèmes bibliques》に共通して気づかれるものは、それ等に看取される VIGNY の神の特異な観念、或いは姿である。

それは、《jaloux》と云う形容詞や《de la vengeance》と云う形容詞句で暗示されている。

《La Fille de Jephté》では、Jephté の言葉

Seigneur, vous êtes bien le dieu de la vengeance ;  
En échange du crime il vous faut l'innocence.  
C'est la vapeur du sang qui plaît au Dieu jaloux !  
Je lui dois une hostie, ô ma fille ! et c'est vous !

の中にこれ等の語句は二つながら用いられている。

《Moïse》では、

Or, le peuple attendait, en craignant son courroux  
Priant sans regarder le mont du Dieu jaloux

とある。

《Le Déluge》には、完全に同一の字句ではないが、近似せる表現として、

On dirait aujourd'hui que les vastes campagnes  
Elèvent leur encens, étalent leur beauté,  
Pour toucher, s'il se peut, le Seigneur irrité

及び、

Et du sombre horizon dépassant la hauteur,  
Des vengeances du Dieu l'immense exécuter,  
L'océan apparut [...]

が見出される。

このほか、《Eloa》では、墮天使 Lucifer が、

Mais s'il est vrai, prends garde au Dieu jaloux ton maître ;

と云って居る。

また、《Le Somnanbule》は所謂《poèmes bibliques》には数えられていないが、1819年に作られたとされているもので、次の詩句に、《le Dieu de la vengeance》とよく似た《un Dieu vengeur》と云う表現が見出される。

Il ne m'a point aimé ! Oh ! ta sainte colère

A comme un Dieu vengeur poursuivi nos amours !

このように、《poèmes bibliques》に顕著な《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》、及びそれ等と酷似する表現は、それ等で示される神の image に対する VIGNY の prédilection を曝露すると看做し得る。しかしながら、この語句そのもの、特に前者は、旧約聖書に頻繁に見出されるものであり、神に《jaloux》と云う形容詞を冠らしめたのは VIGNY の独創ではない。また、この旧約聖書の用語を特に好んだと云う点だけでもって、彼の神の観念が非常に personnel であるとも云えまい。Joseph SUNGOLOWSKY によれば、VIGNY の宗教感情は18世紀から受け継いだところが多く、《le Dieu jaloux》の image も既に VOLTAIRE, ROUSSEAU に見出されると云う<sup>2)</sup>。

だが、最も重要であるのは、《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》と云った表現で示されているものゝ内容であり、それが作家自身とどう関係するかであろう。単に、或る語句がどこから借用されたかを推定するだけでは personnel なものを追求するには不十分である。

かゝる見地から、まず、VIGNY の《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》が何を意味するかの検討が緊要となる。次いで、旧約聖書についても同様の作業が必要である。両者から、少くとも旧約聖書の神と VIGNY の神の異同が判明する筈である。その後で、VIGNY の内部でのこの観念に évolution がありはしないかを調査しなければならないであろう。何故なら、同一の語句または近似の表現が用いられているからと云って、それでもって示そうと作家の企図しているものが、常に全く同じであるという保証はないからである。そこには表現と内容の間の適切さの度合いの問題も係わる。作者の考えには、いつも少しずつ発展があり、ある段階ではある表現が最も適切でも、その後はもうそれ程ではないかも知れない。それにも拘らず、やはり同一の語句が繰り返し用いられる場合も予想され得るのである。

《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》の表現で暗示される VIGNY の神の意味するものを究明するには、《La Fille de Jephté》に立ち向うのが順当であろう。この詩以前の彼の作品にはこの語句は見出されないのであり、この作品以後では、この表現はやゝ色あせた感があるからである。それは、これから述べることで証明されるであろう。《La Fille de Jephté》に於て、《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》、就中前者が、VIGNY のはじめに抱いていた神の観念を最も適切に表現していると判断されるのである。

《La Fille de Jephté》の素材は、そっくりそのままが旧約聖書に見出される。事件その

ものについて云うならば、VIGNY はこれに何の変更も加えていないと云えよう。それでいて、両者の間には実に大きな相違が発見されるのだが、それは後述することとして、《La Fille de Jephté》の《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》の内容について、大まかな考察から始めよう。

《La Fille de Jephté》に於て《le Dieu Jaloux》、《le Dieu de la vengeance》は神を告発するために用いられている。Jephté はイスラエルの民を苦しめる他民族を征討し凱戦したのであるが、褒賞を受けるところか、最愛の一人娘を生贄として神に捧げねばならない。戦勝を祈願して彼自らが神に誓った事とは云え、無垢の処女の夢多き命を断ち、清らかな血を流さねばならない。《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》の表現の蔭から顔を覗かせる VIGNY の神は、就中残酷をその本性とする神、《la vapeur du sang》を最も好む、嗜虐的とさえ形容し得る神である。

この詩篇より 1 年前に書かれ、《poèmes bibliques》の最初のものでされている《La Femme adultère》には、問題の表現は未だ用いられていない。そこで神の姿を想像させるのは、

Cette femme adultère est coupable et surprise :

Que doit faire Israël de la loi de Moïse ?

だけである。Moïse が神より授かった十戒と云う掟に照らすならば姦婦は石で打ち殺されねばならない。この詩篇は場景を新約聖書に得ているものの、そこで非難されているのは《jaloux》と云う形容詞を自らに冠らせている旧約聖書の神、即ち過失を容赦しない神と云えよう。この詩篇で《le Dieu jaloux》が用いられなかつたのは、《le Dieu cruel》を弾劾することに VIGNY の考えが集中していなかった所為であろう。

ところが、《La Fille de Jephté》では VIGNY の意図は単一化している。cruauté を本性とする神を糺弾すること、これがその明確な目的である。

《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》と表現される VIGNY の神は畢竟《le Dieu cruel》、即ち被造物を最後には常に滅ぼす、恐ろしい、不感不動の神と規定できる。そして、VIGNY のこの神の本性は他の《poèmes bibliques》にも受け継がれている。だが、この残酷な神を断罪する理由はこれより後は一層具体的となるようである。神は常に残酷なのであるが、その理由が変わって来る。その検討に移る前に、これ迄に得られた VIGNY のこの《le Dieu cruel》と旧約聖書の《le Dieu jaloux》を次に比較しよう。

旧約聖書の神は確かに自ら

《Yahvé ton Dieu est un feu dévorant, un Dieu jaloux.》

(Deutéronome 4, 24)

《...moi Yahvé, ton Dieu, je suis un Dieu jaloux...》

(Exode 20, 5)

《...Yahvé a pour nom Jaloux : c'est un Dieu jaloux.》

(Exode 34, 14)

と云っている<sup>3)</sup>

しかしながら、旧約聖書の神は何の理由もなく、また情容赦もなく、被造物を殺し、血の匂に酔い痴れる sadique な神ではない。エホバが妬む神、復讐の神として現われるのは、その命令

『あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。』(出エジプト記20. 3—5)<sup>4)</sup>

に、人間一より正確に云うならば、イスラエルの民一が背いた時である。その時は、

『父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし』(出エジプト記20. 5)

『あなたたがたはヨルダンを渡って行って獲る地から、たちまち全滅するであろう。』(申命記4. 26)

ことを予言する恐ろしい懲罰の神となる。

だが、イスラエルの民がエホバの言葉に従う限り、

『あなたの神、主はいつくしみの深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず』(申命記4. 31)

『わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。』(出エジプト記20. 6)

事を確約する。

旧約聖書の神は畢竟イスラエルの民族神であって、イスラエルの民がこの神を冒瀆すれば、これを膺懲することはあろうとも、その妬む神の本性はイスラエルの民を苦しめる他民族に対して、当然、よりしばしば、また、より激しく現われるものである。出エジプト記に記されている、抑圧民族エジプト人に降り懸った、エホバの罰である数々の災厄のことを想起すれば、それを理解するに充分であろう。

エホバの復讐により、エジプトの河という河の魚は全部死に、悪臭鼻を突いて、エジプト人は河の水を飲むことができなくなった。また、蛙や蚤や蚋の大群に次々と責め呵まれ、彼等の家畜は悪疫のために壘殺しに合い、雹に打たれて農作物は大損害を蒙り、それに止まらずその被害は人畜にも及び、同時に激しく襲った雷はエジプト人の心胆を寒からしめた。エホバの祟はそれではなかった。更に蝗の大群の害が加えられ、遂には、エジプト人のすべての長子は殺害され、彼等の所有する家畜のすべての首生は屠殺された。これに反して、イスラエルの民はこれ等の災害のすべてを免かれ、最後には紅海の水が別れて彼等はエジプトより脱出できた。しかし、エジプト人の追手は流れ返る海水に巻き込まれて全員海の藻屑と消えたのである。

旧約聖書の、イスラエルの民に対してはかくも恩恵的であり、これに敵対する他民族に対してはかくも残虐な神は、同じく《le Dieu jaloux》と呼ばれても VIGNY の神とは異っ

ている。語句こそ旧約聖書から借用したものであっても、VIGNY の《le Dieu jaloux》はすべての被造物一殊に人間一に対して残酷な神であって、選民であるイスラエルの民に対しては慈父の如き旧約聖書の神とは似て非なるも甚しい。

話を《La Fille de Jephté》に戻すと、なるほど旧約聖書の逸話と VIGNY の詩篇で語られている物語とは殆ど同じである。類似にのみ気を取られているならば、この詩篇は何等の問題も提起しないかに見える。《La Fille de Jephté》に旧約聖書からの借用をいくら沢山発見しても大して意味はない。話の大綱には何の差異も見出されないのであって、前者は後者の韻文による仏訳に過ぎないのである。ところが差異を追求する時、あれ程酷似せる外装の下にこれ程甚しい違いが隠されているのを見出して吃驚せざるを得ないのである。

鍵は先に引用した詩句

C'est la vapeur du sang qui plaît au Dieux jaloux !

Je lui dois une hostie, ô ma fille ! et c'est vous !

が握っていたのである。

VIGNY は Jephté に斯く絶叫させることにより、残酷なる神を告発しているわけであるが、旧約聖書の Jephté にはまさにその瀆神の言葉が見出されない。

もし旧約聖書の Jephté に不敬虔の罪があるとすると、それは最愛の一人娘を生贄として殺す彼の行為に認められる傲慢にあろう。何となれば、アブラハムを試みてその子イサクを燔祭として献ぐべしと云う残酷な命令を出したエホバは、アブラハムが手をのべ刀を取ってまさにその子を殺そうとした時、使者を派遣してこれを止めさせているからである<sup>5)</sup>。それだけでなく、其後は、自分のむすこ、娘を火に焼いてささげることは、厳禁されている。したがって Jephté が娘を燔祭としてささげれば、神の掟に違反すると云う大罪を犯すこととなる。Fernande BARTFELD によれば、聖書註解者の中には、Jephté は娘を殺したのではなく、処女のままで一生を終えさせてその誓約を果たしたと説くものもあるが、VIGNY はおそらく Dom Calmet に準拠して、Jephté の娘が本当に父の手にかかって死んだとしたのであろう。しかしながらその Dom Calmet ですら神をこの不幸な出来事の原因としないよう注意しているとある<sup>6)</sup>。

ところが、VIGNY は Dom Calmet の解釈を半ばしか採用せず、慎重さの欠けた Jephté の言行は棚上げして、Jephté の誓約を種にどこまでもその遵守を強いる、無慈悲で情状酌量することを知らない石頭の神を暗示する為に旧約聖書を利用した。《La Fille de Jephté》は《le Dieu jaloux》、《le Dieu de la vengeance》の表現で VIGNY の告訴する《le Dieu cruel》をかなり巧みに示している。しかしながら、その神は、自ら《jaloux》を標榜しながら、実は自分の選んだ民に対して全く寛容で恩恵を施す旧約聖書の神とは、その根本に於て完全に異なっているのである。

## (2) Le Dieu cruel qui abandonne son élu

《Moïse》にも《le Dieu jaloux》と云う表現が検出されることは先述した。しかし、語

句が同一と云う事が重要なのではない。その語句の示すものが何であるか、また、その語句が適切であるかを知ることが肝要である。《le Dieu jaloux》と云う旧約聖書の語句は、実を云えば《La Fille de Jephté》の VIGNY の神を表わすものとしても最も良いものであるとは云えまい。そこで VIGNY が摘発したかったのは、何の罪もない人間を理由もなく迫害する嗜虐的な神であったのだから。その意味からすると聖書の Jephté の娘の悲話そのものも VIGNY の目的に好都合とは云えない。旧約聖書に彼の企図と合致する例を求めるなら、それはヨブ記であろうと Fernande BARTFELD 女史は述べている。それに全面的に賛成はできない。それは後に述べるが、同女史の研究は吾々にとって非常に有益な示唆に富んでいる。

ところで、《Moïse》に認められる神は《La Fille de Jephté》で把握されたものと全く同じであろうか。この詩篇に用いられている《le Dieu jaloux》はそれを証明するにはあまり効力はない。それが《La Fille de Jephté》の神と旧約聖書の神の類似の証明に於て有効でなかったことは既述した通りである。同一の語句は、むしろ内容の変化を疑わしめるのである。その差異は今度は《Moïse》そのものの分析が手掛りをもたらすのである。

《Moïse》も《La Fille de Jephté》同様、一見したところでは、素材に非常に忠実である。勿論、細部に於て VIGNY は種々と細工をして居る。例えば、彼が Moïse のした事として列挙した奇蹟の中には彼のではなくて他の予言者達の exploits が混入している。けれども、それは Moïse を超人として崇める為であって、その精神は旧約聖書に必ずしも悖るものではない。旧約聖書の Moïse と《Moïse》の主人公の差異を明らかにする鍵を握るかにみえる例の refrain

Laissez-moi m'endormir du sommeil de la terre !

も似たような訴え、

《Je ne puis, à moi seul, porter tout ce peuple: c'est trop lourd pour moi. Si tu veux me traiter ainsi, tue-moi plutôt ! Ah ! si j'avais trouvé grâce à tes yeux, que je ne voie plus mon malheur !》

が民数記11. 14—15 に在るので、この refrain に嗅ぎとられる lassitude が VIGNY の Moïse の特質であると極め込むのは性急に過ぎるのである。《Moïse》に於ても注目すべきはこの詩篇に浮彫されている神の姿であり、それとの関聯で《Moïse》の主人公の lassitude は特異となるのである。

《Moïse》の神も残酷ではあろう。しかし、その残酷さは《La Fille de Jephté》の神の残酷さとは異っている。後者では神は vapeur du sang を好む、どちらかと云うと肉体的苦痛を犠牲者に与えて快感を得る sadique な性格を示すと見えた。《Moïse》の神がその主人公に与える苦痛は、これに反して、むしろ精神的である。VIGNY の Moïse は

Que vous ai-je donc fait pour être votre élu ?<sup>7)</sup>

と云う問いを發し、次いで、以下の如く縷々自分の不幸を訴えている。

Sitôt que votre souffle a rempli le berger,  
 Les hommes se sont dit : « Il nous est étranger » ;  
 Et leurs yeux se baissaient devant mes yeux de flamme,  
 Car ils venaient, hélas ! d'y voir plus que mon âme.  
 J'ai vu l'amor s'éteindre et l'amitié tarir,  
 Les vierges se voilaient et craignaient de mourir.<sup>8)</sup>

.....

長くなるのでこの後は割愛するが、この嘆きは、要するに、神に選ばれ、神の力を吹き込まれた為に、自己を喪失した不幸を訴えている。Moïse は個人として偉大なのではない。彼は《homme de Dieu》として選ばれた神の代理に他ならない。極言すれば一種の自動人形であって神の意志の代行者である間は自分の本性は抑圧されているのである。かかる強制をなす神は暴君的であり、個人の自由と権利を侵害する故に篡奪者である。

《Moïse》の主人公の特徴は先に言及した例の refrain で判明する通り、彼が死を願っていることである。この詩篇では何故彼がそれを切望するかが必ずしも明確ではない。彼が強大な力を持っているにも拘らず、孤独であることが、その理由らしく、それは繰り返し述べられている。普通の人間とはあまりにその才能がかけ離れている為に苦しむ天才の悲劇、これは VIGNY が後年の自作解説で明言していることである<sup>9)</sup>。それに、このテーマは如何にもロマン主義的であり、先例もあって理解し易く思われる。しかし、VIGNY の自作解説は、後年のものと云う事もあって必ずしも信用できない。作者自身が当時も後もあまり意識していないところに本当の理由がある場合も可能である。また、天才の悲劇を唱っただけにしてはここに認められる神の観念は奇異な感じがする。これの解明は旧約聖書の Moïse と VIGNY それとの対比によって突破口が見出される可能性もある。それを期待して、次に旧約聖書の Moïse について考察しよう。

エホバは確かに Moïse を選んで彼を平和な生活から引張り出し、救国の英雄とし、古代イスラエル中興の祖としての茨の道を歩ましめた。旧約聖書の神は Moïse を自分の意志の代行者とする為に、彼に超自然的力を貸与し、数々の奇蹟を行わせた。けれども、エホバは彼をロボット扱いはしていない。神はまず茨の火の奇蹟で自己の存在の証を立て、Moïse の所属するユダヤ民族の先祖代々の守護神であることを告げた後、Moïse の愛国心を鼓舞激励してその困難な役を受諾せしめている。勿論、それは神意として拒否できない強制であって、旧約聖書の Moïse も所詮《homme de Dieu》であることは否定できない。しかし、Moïse の躊躇も専ら己の弁舌の才の欠除に由来し、彼とても救国の任務を拒否する意志はなかった。エホバは弁舌の点では Aaron の補佐と、其他諸々のことでは神自身が Moïse の任務遂行を援助することを確約した。先に引用した、Moïse の死を願ったまでの訴えの場合もそうであり、《Moïse》の場合と異って、旧約聖書の Moïse は自分の力に比して責務の大き過ぎることを嘆いて、その苦悩よりは、むしろ死を願ったのであ



るが、エホバはその時も早速彼の負担を軽くすべく Moïse に次のように云っている。

『イスラエルの長老たちのうち、民の長老となり、つかさとなるべきことを、あなたが知っている者七十人をわたしのもとに集め、会見の幕屋に連れて来て、そこにあなたと共に立たせなさい。わたしは下って、そのところで、あなたと語り、またわたしはあなたの上にある霊を、彼らにも分け与えるであろう。彼らはあなたと共に、民の重荷を負い、あなたが、ただひとりで、それを負うことのないようにするであろう。』(民数記11.16-17)

旧約聖書の Moïse は全く神の寵児であって、《homme de Dieu》となった為に不幸にはなっていない。《Moïse》の主人公とは異なり、旧約聖書の Moïse はイスラエルの民を指導すると云う重荷を一人で背負っているのではない。神から選ばれた為に友情を失いもしていない。それどころかエホバは殊のほか Moïse には心を遣い、事あるごとに Moïse を傍に呼び寄せ、或いは自ら親しく彼の許に赴いて彼に指針を与えている。旧約聖書の神は Moïse を滅ぼすのを恐れて面こそ見せぬが、その存在の証としてその背を見せ給う常に顕在の神である。Moïse の問いに解答を与え、訴えにも常に応える神託を下す神である。

これに反して、《Moïse》の神は既に見て来た如く、暴君的篡奪者的な神であるが、それだけではなく、自分が選んだ腹心の者にも本心を打ち明けることのない、また、どのように忠誠を尽しても、もはや利用価値がないと分ると股肱の臣すらも遺棄する王のように、《homme de Dieu》を見殺しにする神である。このことは旧約聖書の Moïse に対するエホバの態度と《Moïse》の主人公が託つその主人である答えなき神の態度とを比較する時、はじめて明らかとなるので、《Moïse》だけをいくら細かく調べても出て来ないのである。《Moïse》で主人公が自分の約束の地に入れなことを仄めかしているのは、実はこの冷酷な神を詰る為なのだが、VIGNY はそれを強調して神が《homme de Dieu》を遺棄したことを告発するのは避けた。何故なら、旧約聖書には、Moïse と Aaron が約束の地に入れなかったのは彼等がわずかでも神の言葉を疑った、その罰であることが明記されているので、それを明るみに出すと、innocent と云うだけでなく méritant でさえある héros を遺棄する廉で神の不正を糾弾するには不都合となるからである。《Moïse》の主人公の不幸の原因がやや不明確なのはこれに起因すると考えられる。従って、《Moïse》で想像される神の cruauté は自分が選んだにも拘らず、その選ばれた者を homme inspiré として自由を奪い却って不幸にし、その選ばれた者が《homme de Dieu》として献身的な働きをしても遂にはこれを見棄てることにある。

このような神の姿を浮彫にするには、Fernande BARTFELD の卓抜な意見にも拘らず Moïse を主人公とする方が Job を主人公とするよりは適切である。Moïse は旧約聖書に於ても明らかに《homme de Dieu》、homme inspiré なのであり、身から出た錆とは云え、その功績にも拘らず、彼は約束の地を踏む事を許されぬと云う不幸を嘗める。これに反して旧約聖書の Job は神の試みのため、また Satan の悪意のために、苦悩のどん底に落とされるとは云え、Moïse の如き《homme de Dieu》でもなければ、《Moïse》の主人公の如

き *homme inspiré* でもない。Job は神から見棄てられるどころか、最後には慈悲深き神の手で復権され、不幸に陥る前と比べて二倍も幸福となって天寿を全うしている。

F. BARTFELD の研究は VIGNY の *originarité* 決定を目的として掲げた画期的なものである。本稿はこれに刺激されて生まれたもので、大いにその恩恵に浴して居る。しかしながら、VIGNY が Moïse の代りに Job を彼の作品の主人公としなかった推定理由として、Job が *lépreux* であったことのみを挙げているのは、いささか説得力に欠けると思われる。彼女と異なり、吾々は、この詩篇では、先述の *homme inspiré* と神の遺棄の二点が重要であり、それが彼 VIGNY をして Job を主人公としては選ばせなかったのだと考える。もし VIGNY が告発する神が《La Fille de Jephté》で検出したような、とにかく人間に対して残酷な神と云うのであれば、前項でも述べた通り、Job を主人公とした作品を書けばそれを非難するには最も適切であろう。だが、《Moïse》の神の姿はもっと現実的な何かと深い関係があり、その為一層具体的な特徴を示している。その残酷さは、*le Dieu cruel qui abandonne son élu* のそれと云うべきで、それが、この詩篇でも依然として《*le Dieu jaloux*》で表現されている神の実体である。

(3) *Le Dieu qui ne fait point de pacte avec la race humaine.*

《Le Déluge》には《*le Dieu jaloux*》と云う表現は見当らない。はじめに指摘したように、大洪水の因である大洋が神の復讐を実現する *agent* であると述べられているので、この《Le Déluge》の神もこれ迄調査して来た他の《*poèmes bibliques*》の *le Dieu cruel* と同性質のものであることは想像される。一方、旧約聖書の神との対比と云うことになる《Le Déluge》に於て VIGNY の神は前者とは全く相反するものである事が明白となる。

従来、この詩篇の特質を示すものとして、次の詩句には、どの研究家も注目している。

*La mort de l'innocence est pour l'homme un mystère ;*

.....

*La pitié du mortel n'est point celle des cieux.*

*Dieu ne fait point de pacte avec la race humaine ;*

*Qui créa sans amour fera périr sans haine.*

ESTEVE のこの詩集の *édition critique* に注記されているように、ここには GESSENER の《*Tableau du Déluge*》に類似の表現を索め得るからである。sources の一つと思われるものが外国文学に在り、比較文学研究上の興味の対象となるからである。ただ単に神の世界と人間の世界の次元の相違の指摘がこの詩句に盛られていることが問題であるならば、VIGNY の母親の《*Conseils à mon fils*》にもそれへの言及は在るし、旧約聖書そのものにも尋ね得よう。重要な事は、それ等が結局は信仰の強化の為に述べられているのに対して《Le Déluge》では神から離れる口実を提供していると思われることである。しかしながら、それよりも、もっと明白に、VIGNY の神と旧約聖書の神との絶縁を示すのは、当然過ぎる故か、これ迄誰もその重要性を指摘したことがないと思われる次の詩句である。

Dieu ne fait point de pacte avec la race humaine ;

sources 発見を主として来たこれ迄の研究は、どれ一つとしてこの詩句に注を施していない。originalité の問題に最も強い関心を示している F. BARTFELD すら、この箇所を引用しながらこの詩句は看過している。もっとも彼女の場合は《Moïse》の originalité が最大の関心事であって《poèmes bibliques》全体は問題ではなかった。従って、《Moïse》より後に書かれた《Le Déluge》は意識的に検討の対象からはずされていた。《Le Déluge》は、《Moïse》の originalité を形成すると彼女の判断する諸点についての考察が済んだ後、彼女の労作の中で、二度取り上げられているが、彼女の興味を唆るものがこの詩篇にはなかったのか、注目すべき言及は遂になされずに終わっている。

ところが吾々の目的である《poèmes bibliques》と旧約聖書を対比して両者の神の観念の差異を検出すると云うことからすると、これ迄無関心のまま打ち棄てられて来たこの詩句は、第一級、或いは別格の重要資料となる。何故ならば、この詩句により、VIGNY の《poèmes bibliques》の神の最大特質「契約せざる神」は紛うかたなきものとなるからである。

これ迄、直隠しにかくすことにむしろ困難を覚えた程である、旧約聖書の神の第一の性格は、実は、契約の神というところにある。

創世記によると、エホバは人の悪が次第に地に大いなるを見て、地の上に人を造ったことを後悔した。そして人をはじめ全ゆる生物を滅ぼさんとして、大洪水を遣わすことを決心した。しかし、その前に Noë と契約をたて、Noë が子等と共に自分の妻、子等の妻達を連れて、方舟に入るよう命じた。この時からエホバが契約の神であることは決定的であるが、彼はことある毎にイスラエルの民の指導者の許に現われてこの性格を繰り返し明言している。

旧約聖書の神が《le Dieu jaloux》を標榜していることは既に言及した。この神は自分の権威に特に敏感であり、これが犯された時、彼はその罪を懲らす為恐ろしい神となる。一方、この神は守護神であって自分を信じ愛するものの為には、いかなる努力も惜しまぬ恩恵の神である。この相反するかに見える神の性質は実は契約の神である彼の本性によって統一されている。彼が懲罰の神となるも、恩恵の神となるも、その前提に契約があればこそである。契約せざる者に対しては、彼は如何なる特性も恒常的に示しようがなく、全くの無関心の神となろう。むしろ不在の神と規定されることが自然とさえ考えられる。

VIGNY の神は《poèmes bibliques》以後の作品では次第にこの不在の神に近くなる。それは既に《Suzanne》では次のように表現されている。

En vain ton désespoir à ses pieds abattu

Jetterait au Dieu sourd les cris de la vertu,<sup>10)</sup>

《Moïse》では神は勝手髯の段階であった。《Le Déluge》では予てその素振から怪しまれていた契約せざる神の姿が遂に曝露された。これに呼応するかの様に、同じく1823年

に《Le Trappiste》では神の地上の代理者である王の本性が曝露されている。

《Le Trappiste》は狭義の《poèmes bibliques》には入れられていない。それだけでなく、この詩篇に注目する者は、概して少い。しかしながら、《Le Déluge》と共に、そこに見出される外的権威に対する VIGNY の態度は考究するに値いするのである。ここでは割当頁数の都合で詳述できないので後日に譲るが、VIGNY の《poèmes bibliques》に於ける神の観念を理解する重要な手掛りを《Le Trappiste》は匿しているのである。

#### (4) Le Dieu qui punit l'amour.

《Le Déluge》は VIGNY の神のもう一つ別な性質を明らかにする。それは恋愛を罰するという性質である。この le Dieu qui punit l'amour とでも表現すべき神の姿は、これ以前からその片鱗を垣間見させていたのであるが、《Le Déluge》に至って漸くその全貌を明らかにしたわけである。

《La Femme adultère》の恋愛は姦通である。これは Moïse に十戒を授けた神からはまさしく罰せられるに値する。姦婦は幸いにも石で殺されることを免れたが、それは新約聖書の世界だからであり、旧約聖書の時代の《Suzanne》の主人公は同じく姦通の濡衣を着せられて危く裁かれるところであった。この罪は時代が新らしくなるにつれて罰を軽くする。《Quitte pour la peur》は VIGNY によって1833年に発表された戯曲であるが、そこではこの罪は残酷な神の問題とはもはや緊密な関係を有していない。もともと姦通罪を犯した女、或いはその疑いのある女を弁護することは、神の残酷さを非難するのに最適ではない。迫害者の不正を最も痛烈に糾弾するには犠牲者がより罪なき場合の方が効果的である。《La Fille de Jephté》の女主人公には何の罪咎もない。それにも拘らず、彼女の青春は摘みとられ、仮に父の手にかかって一命を落さなかったとしても、彼女は愛を禁じられて一生を終らねばならないのである。彼女の嘆き<sup>11)</sup> は明らかに愛を知らずしてこの世を去る処女の恨みを綴っている。ところが旧約聖書の Jephté の娘はそのような言葉をもらしてはいない。詩人が、処女の気持を代って述べたとすれば、それが彼の独創であるかを尋ねなければなるまい。

《Moïse》にも先に引用した詩句<sup>12)</sup> に homme inspiré の嘆きがこめられ、主人公は神の僕として選ばれたが故に愛情に飢えるよう判決されているのが分る。

《La Prison》に同じ苦悩を読みとることも容易である<sup>13)</sup>。《Le Somnambule》に明記されていた如く<sup>14)</sup>、le Dieu qui poursuit l'amour といふか le Dieu qui punit l'amour と命名すべきか、または、これこそ《le Dieu jaloux》と呼ぶべきか、人間の恋路を邪魔する神のテーマは、この詩人にとっては《poèmes bibliques》の書かれた頃、特に顕著であり、それが、最も明瞭に示されるのが、《Le Déluge》に於てである。しかしながら、残念なことにこれを詳述することは、頁数の関係で、本稿では不可能である。ただ旧約聖書を調査したところ、筆者の判断では、この神の姿は、そこから来たものではないと云えることを附記して置こう。旧約聖書に於て神はイスラエルの民が自分の息子に他民族の娘

を娶らせたり、または自分の娘を他民族の男に嫁がせたりすることは、確かに厳禁している。だが、それは、イスラエルの民がエホバ以外の異国の神を拝むという罪を犯さないようにする為であって、恋愛そのものを罪惡視しているのではない。旧約聖書には却って逸楽を謳歌しているところさえ発見できるが、そもそもこれがイスラエルの民の繁栄の祈願をこめたものであることは、神が度々この民の子孫が地に満ちるよう祝福にしていることでも分る。かかる旧約聖書の神が愛を断罪する神ではあり得ないので、VIGNY のこの神の観念も他に出所を求めねばならないであろう。

いま《le Dieu jaloux》は別としても、VIGNY の神のその他の属性は旧約聖書の神のそれと相反することは歴然としている。しかしながら、その理由だけをもって、VIGNY の神の観念が全く *personnel* なものであるとするのは早計であろう。VIGNY の作品の *sources* が多方面に索められることは周知の事実である。吾々が本稿で試みたことは、その冒頭で限定したところではあるが、課題として、ここで抽出し得たものの検証が残っているのは否定できない。しかしながら、それはこれまでなされて来たこととは異なっているので、これ迄得られた成果を援用して済まされることではない。したがって、VIGNY の神の観念が、*personnel* だと云い得るには、直接の資料以外では不可能であるので、かなり長い先のこととならざるを得まい。

一方彼の神の観念が仮に *personnel* だと決定したとしても、今度は、当然それが何処に由来するかを云わねばならぬ難問が横わっている。この点についても、諸家の研究でいま直ちに有用なものはない。吾々としては、後者について一つの假設をたてているので、むしろその当否の批判を得たい状況にある。しかしながら、それは前者について或る成算を得た時にならなければ効力を発揮しない。いずれにしても以上が吾々の課題であり、はじめに断った通り吾々はやっと前進の手掛りをつかんだに過ぎないのである。

#### 注

- 1) Jacques CLEMENCEAU LE CLERC ; L'Inspiration biblique dans les Œuvres poétiques de VIGNY, 1937 ; Grandchamp, in-8°
- 2) Joseph SUNGOLOWSKY ; Alfred de VIGNY et le 18<sup>e</sup> siècle, 1968 ; Nizet. p. 74.
- 3) 旧約聖書の仏訳は VIGNY 自身が用いたものによるべきであるが、ここでは字句対比は問題ではないので、たゞ《jaloux》なる語が使われていることを示すため、LA BIBLE du peuple Le Centurion/Le Cerf, 1971 の仏文を引用した。しかし、今後はその必要もないので日本語訳を用いる。
- 4) 『聖書』1955年改訳 日本聖書協会 JC63 より引用。
- 5) 創世記 22. 10.
- 6) Fernande BARTFELD ; VIGNY et la figure de Moïse, 1968 ; MINARD, p. 20-p. 21. 脚註
- 7) Œuvres complètes, Pléiade tome 1. p. 8.
- 8) Ibid., p. 9.
- 9) Correspondance 1 Notes et commentaires par Léon SÉCHÉ, p. 101.
- 10) POÈMES, 1914 Conard ; p. 273

- 11) Œuvres complètes, Pléiade tome 1, p. 45.
- 12) Ibid., p. 9.
- 13) Ibid, p. 75.
- 14) Œuvres complètes, Pléiade tome 1, p. 53.

Quelques considérations sur les *Poèmes*  
*Antiques et Modernes* de Vigny

(2) Les caractéristiques des «poèmes bibliques».

Ryûji TANAKA

Maints efforts ont été faits jusqu'à présent pour trouver des sources des «poèmes de l'inspiration biblique» dans les *Poèmes Antiques et Modernes* de Vigny.

Cependant presque aucune étude n'a jusqu'à ce jour été entreprise sur l'originalité ou tout au moins sur les éléments personnels de ces «poèmes bibliques», sauf celle de Fernande BARTEELD, intitulée *Vigny et la figure de Moïse* et publiée en 1968, qui traite exclusivement de l'originalité de Vigny dans un de ses «poèmes bibliques», *Moïse*.

Le présent essai est conçu, stimulé par l'ouvrage ci-dessus cité de BARTEELD. Nous y indiquons la notion particulière qu'a Vigny de Dieu comparée à celle du Dieu de l'ancien testament : «le Dieu jaloux», terme d'ailleurs souvent trouvé dans *la Bible* et emprunté fréquemment par Vigny, dans les «poèmes bibliques» mais que l'on devrait nommer à vrai dire «le Dieu cruel qui abandonne son élu et qui ne fait point de pacte avec la race humaine, mais qui punit l'amour», d'après notre analyse de la notion qu'a Vigny de Dieu surtout dans ses «poèmes bibliques».

Ce à quoi nous devons nous consacrer par la suite, c'est de rechercher si cette notion singulière de Dieu est vraiment personnelle à Vigny et si elle l'est, de découvrir son origine.